

審査の結果の要旨

氏名 田中 志帆

不登校、いじめ、学級崩壊など、学校に関連する問題のアセスメント方法として有効性が示唆されている動的学校画については、我が国ではほとんど実証研究はなされていない。そこで、本研究では、動的学校画を多数の児童生徒を対象として実施し、その特徴を明らかにすることによって、教育臨床アセスメントとして動的学校画を活用するための基盤づくりをすることを目的とした。論文は、研究の問題と目的を示す第1部、非臨床群の児童生徒を対象とする量的調査によって動的学校画の特徴を明らかにする第2部、学校で不適応を示す児童生徒群と健常群の描画の比較研究を行う第3部、学級の混乱がどのように反映されるのかを調査する第4部、研究の成果をまとめる第5部から構成される。

第1部では、第1章で学校に関連する心理的問題のアセスメント技法として臨床描画法の必要性を示し、第2章で内外の研究のレビューに基づいて本研究の課題と方法を示した。

第2部では、基礎的研究として第3章で小学生から中学生までの非臨床群における動的学校画の各変数の発達的变化を検討し、人物像の大きさや友人の数に学年変化がみられる等の特徴を明らかにした。第4章では非臨床群の児童生徒の、学校適応感および教員や友人との親密感に関連する自己評価と動的学校画の変数との関連性を検討した。その結果、親密性と人物像間の距離との関連性等、複数の関連性を確認した。

第3部では、不適応を示す者の描画傾向を主に検討した。第5章では、3～4年間継続して描画研究に参加した児童35名に、絵を描いた理由を尋ねる構造化面接を行い、その回答と振り返り作業から、自己像と友達像の距離が心理的距離を表すことを明らかにした。第6章では、担任にとって気になる児童生徒とそうでない者の動的学校画変数の出現頻度について量的比較を行ったところ、前者のほうが叱責場面の出現頻度が多く、また人物像をより小さく描くなどの傾向がみられた。第7章では臨床群（適応指導教室に通級する不登校児童生徒）と非臨床群の動的学校画の比較をしたところ、前者の方が低い活動性、横一列に並ぶ人物、正面向き自己像、腰下を描かないといった変数の出現頻度が多かった。

第4部では、第8章で学校臨床心理士への調査によって学級の荒れの現状を明らかにし、第9章では生徒の攻撃性が教師イメージの形成に関連していることを示した。第10章では、担任評定および生徒評定によって荒れている学級を特定し、それと関連する動的学校画の変数をみたところ“長い腕”が多く、“黒目のみの眼”が少ないとの特徴がみられた。

第5部では、本研究で得られた結論をまとめた。本論文は、さまざまな適応レベルを示す多数の児童生徒を対象とし、担任評価や学級全体の状態との関連性も考慮し、縦断調査も行うなどして多様な観点から、問題事象と動的学校画の変数との関連性を分析することによって、問題行動や荒れた学級の状態をアセスメントする手段として動的学校画を活用するための基礎を築き、その方向性を提案した点で特に意義が認められる。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。